

令和八年五月号
 《第百六十一号》
しるへび
 宗教法人岩國白蛇神社
 〒740-0017
 今津町六丁目4-2
 ☎ 30-3333

さつき
皐月の祭典・行事案内



【月次祭】 九時半
 七日(木)
 三十一日(日)
 【第十六回総代会】
 十六日(土) 十時
 白蛇会館二階

【昭和天皇御製】(第一二四代)
 「五十年祭にあたりて昭憲皇太后をしのぶ」
 わが祖母はきせる手にしてうから
 のあそびをやさしくみそなはしたり
 「紙」
 世にいだすと那須の草木の書編み
 紙のたふときことも知りなき
 (昭和三十九年)

「昭和百周年」にあたり
 今年は、1926年(大正十五年・昭和元
 年)から百周年にあたります。当時摂政であ
 られた皇太子裕仁親王殿下は十二月二十五日

に大正天皇崩御に伴ひ、直ちに踐祚式をされ、
 若槻内閣は新元号を「昭和」とすることを発表
 しました。中国の「書経」から『百姓昭明』



「天皇を中心に国民がまとまり、世界中の国
 々が協調していくこと」の意味と説明されま
 した。

『万邦
 協和』
 から採
 用し、
 国民み
 んなが
 明るく、
 世界が
 平和で
 あるこ
 とを祈
 念し、

つきなみさい
【月次祭】 毎月二回巳の日

他の神社が一日と十五日に斎行してゐる
 月次祭を、当社では神々の使いとされる白
 蛇にちなみ巳の日に祭典を行つてゐます。
 令和七年度の参列者は延べ五百十三名で
 した。平均すれば二十一名の参列でありま
 した。特に己巳の日の参列が多く、十
 月二十七日には六十名の参列があり、嬉し
 い悲鳴をあげたほどでした。有り難い限り
 であります。
 月次祭に参列の方には、御神酒拝戴後に
 財布用の小札(月初め)と撒饌(お供米・
 清め塩・錦帯煎餅)が授与されます。又、
 御神前にお供えた御神酒を料理酒として、
 時々希望される方に授与してゐます。

【推薦図書】

「それでも息子を
 日本の小学校に通わせたい」
 新潮新書 900円+税
 山崎エマ 著



「日本の公立小学校は、子どもの人格形成
 に深く関わり、勉強を超えた学びを提供
 する、世界でもまれな教育システムを持つ。
 イギリス人の父と日本人の母の間に生まれ、

『国防神社』

久野潤 著 一九八〇円
 ワニブックス

「本書の歴史学者である久野潤氏によ
 る神話から大東亜戦争、現在に至るまでの
 『国守り』としての神社の通史を著したも
 のです。600社以上の神社を訪れ、神職

久野潤 Jun Kuno
◆竹田恒泰 Junpei Takeda

国防神社

古代から
大東亜戦争、
そして現在



の方など直接聞いてきた話は、驚く事実も多く、先人たちの大いなる知恵が明らかに
なる内容です。」
（ワニブックス書籍編集部 川本悟史氏による推薦文から）

本居宣長

『直毘霊』を読む（十二）

かく道といふことを作りて正すは、もと道の正しからぬが故のわざなるを、かへりて猛きことに思ひ言ふこそをこなれ。そも、後の人、此の道のままに行はばこそあらめ、さる人は、世々に一人だに有りがたきことは、彼の国の世々の史どもを見てもしるき物をや。

（続く）

【現代語訳】

このやうに、道といふことを作つて人の行ひを正すのは、もともと道が正しくないためのことであるのに、逆に立派なこととして思つたり言つたりするのは、馬鹿なことである。それも、後世の人がこの道の通

りに行ふのであるならば、それでいいだろうが、さうではないので、どうしやうもない。そのやうな人は、代々一人さへもなすふなことは、歴史書の類を見てもはつきりとしてゐることだよ。

岩国護国神社春季例祭(報告)

四月十一日



岩国市民の守神でもある護国神社の春季例祭がおよそ五十名の参列を得て挙行されました。

遺族会の方々を始め岩国市長・岩国市議会議長・吉川事務所・岩国海上自衛隊郡司令の代理他が参列しました。三千三十三柱の英霊に御霊安かれと、市民と国家の繁栄と恒久平和の祈りを捧げました。

英霊の直接の遺族の方が減少するなか、私たち岩国市民が「遺族」であるとの念いで春秋の例祭、そして8月のみたままつりに是非とも参列を頂きたく思ひます。そして、身命を賭して、家族・ふるさと・国家を守り抜かうとした先祖の英霊の心

に触れてみようではありませんか。



さる四月十九日(日)に今津天満宮(菅原社)の例祭に合はせて、「神牛の石像」が奉納されました。(当社の向かひに鎮座)戦前には青銅製の臥牛の像がありました。先の大戦中(昭和十八年)金属類回収令により供出され、石の台座のみとなつてゐました。



ご安堵されたこととお察し致します。そして、今以上に多くの参詣で賑はふことが大いに期待されます。

戦後八年、今年、十周年を機に、元の神座に神牛像が甦ることに。さ。御祭の菅原道真公も